

五期俳句会 第一百六十回 十二月一日

久し振りに全員揃う、先月のプリントを配ると、明治節も歌も知らない方（誰とは言いませんが）がいて久貝さんと私でちよつと唄った。

紀元節や天長節までは言わないが、何となく懐かしい。

遠き峰かすみて秋も移りゆく

塩田豆子

柿紅葉残る生命のはなやかに

今井由紀子

湯の宿の入口飾る石落つわの花

松浦武子

新しき畳と競ふ寒菊の白い

浅香さとみ

植木屋の秋剪定後猫いづこ

久貝貞子

黄金葉の落ち来る道や通学路

塩田豆子

葉を落としつるの子柿のたわわなる

松浦武子

冬の夜や検診無駄と医者の本

浅香さとみ

連休は人込み合つて冬ぬくし

浅香さとみ

ふる里の秋空うつす川やさし

今井由紀子

暖かき十一月となりにけり

久貝貞子

田舎道無人の屋台柿ならぶ

塩田豆子

丹後路の山装ひて迎えくれ

松浦武子

馴染み薄き音声のして冬に入る

浅香さとみ

古民家の壁這い昇る蔦紅葉

松浦武子

生かされて巡る八十路の秋深し

塩田豆子

大川の桜紅葉の燃えつづく

今井由紀子

秋日和傘寿祝いに淡路へと

久貝貞子

残照と荒波の音冬めけり

松浦武子

健さんを偲ぶ映画や師走来る

浅香さとみ

今回も蔵本さんが莓大福を作って来て下さった。他にもみかんやお菓子などあり、食べきれず一部持ち帰る。